



## 中国語会話書から見た近代日本語の研究

著者	園田 博文
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301乙第9371号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00123983">http://hdl.handle.net/10097/00123983</a>

## 中国語会話書から見た近代日本語の研究

園田 博文

### 目次

凡例

序章

- 1 本研究で扱う中国語会話書とは
- 2 中国語会話書の分類
- 3 研究の目的、方法および資料
- 4 各部における内容

第1部 中国語会話書・中国語教育の背景

第1章 中国語会話書および中国語教育の背景についての概観

第2章 中国語会話書一覧

附 中国語教育・中国語会話書関係年表

第2部 I期（草創期）における日本語資料としての『語言自邇集』訳述書

第1章 『問答篇』『語言自邇集』をもとにした訳述書2種の日本語

第2章 I-2期（草創後期）中国語会話書における文末表現と助動詞「です」

第1節 『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』の文末における待遇表現

第2節 中国語会話書における助動詞「です」の用法について

第3章 『参訂漢語問答篇国字解』と九州方言語彙

第1節 九州方言語彙

第2節 会話文中の語の解釈

第4章 『総訳亜細亜言語集』と『参訂漢語問答篇国字解』における

「に」と「へ」

第3部 II-1期（確立前期）における日本語資料としての日清韓会話書と

台湾語会話書

第 1 章	指定丁寧表現・形容詞丁寧表現について
第 1 節	日清韓会話書における指定丁寧表現・形容詞丁寧表現
第 2 節	明治初年日本語会話書との比較
第 2 章	『日清会話』と『日韓会話』の成立過程に関する考察
第 3 章	台湾語会話書と植物語彙
第 4 部	Ⅱ－2 期（確立後期）における日本語資料としての主要な 中国語会話書
第 1 章	主要な中国語会話書〈Ⅰ〉に現れる日本語
第 1 節	日本語資料としての『官話指南総訳』（明治 38 年）
第 2 節	日本語資料としての『東語士商叢談便覧』と 文求堂主人田中慶太郎
第 3 節	『北京官話談論新篇』と総訳本 2 種（明治 43 年、昭和 8 年） について
第 2 章	主要な中国語会話書〈Ⅱ〉に現れる日本語
第 1 節	『官話急就篇』『急就篇』と総訳本 4 種（大正 5、6、13 年、 昭和 9 年）の日本語
第 2 節	『官話急就篇』『急就篇』訳述書の質問表現
第 5 部	中国語会話書における日本語訳文の特徴
第 1 章	人称代名詞について
第 1 節	中国語会話書における人称代名詞の直訳度
第 2 節	『総訳亜細亜言語集』における人称代名詞
第 3 節	『官話指南総訳』『東語士商叢談便覧』における人称代名詞
第 2 章	当為表現について
第 1 節	中国語会話書における当為表現の特徴
第 2 節	『官話急就篇』総訳本 4 種における当為表現
第 3 節	『東語士商叢談便覧』における当為表現
終章	
	既発表文献との関係
	参考文献
	あとがき

## 要約

これまで、中国語教育史や中国語学の分野で取り上げられてきた資料である中国語会話書を日本語学の分野でどう位置付けられるかを研究した。方法としては、資料成立の背景を明らかにしつつ、資料に現れる助動詞「です」等の具体的な日本語を分析した。明治10年代における助動詞「です」の多用は、小説や雑誌とは異なる会話書としての側面が反映されていると言える。また、明治30年代になっても、公的交渉の場面は、他の資料には現れにくいので、この場面が現れる中国語会話書は不可欠の資料と言える。台湾語会話書の特別な植物語彙等も、中国語会話書を用いなければ解明できないものである。中国語会話書を分類すると、日本語の発想が主で、中国語文を模索したものがある。これについての研究は、今後の課題である。一方、中国語の発想のもとに書かれ、これを日本語訳した資料がある。日本語訳であるという制約のある資料ではあるが、様々な層（士族的、上層町人的、下層町人的、規範的、慣用的、丁寧、ぞんざい、公的、私的、外交、商用等々）の日本語を考える手がかりとして、このような中国語会話書を日本語学の中の一ジャンルとして位置付けることには意義がある。当然、中国語会話書も他のジャンルの資料と同じく均質ではないので、まずは「主要」な資料から分析を加えた。

以下、順を追ってまとめる。

まず、序章において、本研究で扱う中国語会話書とは、「学習書」「時文・尺牘」「語彙・辞典」等に細分される「中国語関係書」のうち、会話学習に関する例文集が載っているものを指すことを示した。その上で、中国語会話書を分類すると、「日本語の会話文が現れている中国語会話書」と「本文が中国語文のみの中国語会話書」に分けることができる。前者はさらに、「日本語文のみのもの」と「中国語文と日本語文が現れるもの」に分けることができる。両言語が現れるものは「中国語文が先、日本語文が後にあるもの」「中国語文が上段、日本語文が下段にあるもの」「日本語文が上段、中国語文が下段にあるもの」に細分される。日本語文が上段にあるものは日本語の発想で記された日本語文をいかに相応しい中国語文で表現したらよいかというものである。国会図書館蔵本（初

版本)を画像として示し、実際にどのような資料であるかイメージできるように工夫した。

第1部では、中国語会話書および中国語教育の背景について概観した。中国語教育史における先行研究の成果を踏まえ、特に、明治時代のはじめの状況についてまとめた。キーパーソンといえる人物を7名取り上げ、時期区分を行い、どのような背景で、どのような人物が、どのような目的で中国語会話書を著したかが分かるようにした。

その結果、明治の初め、中国語を教えた教師は長崎唐通事であり、中国語を学んだ生徒は、長崎唐通事の子弟や漢学を学んだ者であった。中国語会話書も初めは、長崎唐通事に繋がる者、士族、漢学者の子息が著したものであった。明治の初めの中国語教育は、英語教育等とは異なり、通弁や外交官、陸軍通訳官を養成するものであった。やがて、これらの中国語教育を受けた者の中から、中国語の教師、通弁、外交官、陸軍通訳官、中国語を解する軍人さらには商業・貿易に携わる者が現れ、また、その一部は、中国語会話書を著すことになる。留学生として清国に派遣された者もいた。中国語会話書の著者の背景を知ること、士族の言葉に通じるものか否か、あるいは、中国語の運用力がほんとうにあったかどうかを知る手がかりとなる。

資料としては、日本語の会話文が現れている中国語会話書107編と本文が中国語文のみの中国語会話書30編を確認することができた。

前哨期である江戸時代の唐話について詳細に調べると本研究に繋がる前提が明確になる。また、大転換期である戦後の中国語会話書、中国語教育を調べれば、本研究で明らかになった事柄が、どう継承されたか、あるいは転換させられたかが見えてくる。これらは、いずれも今後の課題である。

キーパーソンといえる人物を7名取り上げたが、ひとりひとり、さらに詳しく追っていくことも可能であるし、もっと広く数十名程度まで見ていくこともできる。資料についてもまだすべてを網羅してはいないので、網羅的に見れば、数百に及ぶ資料を示すことができる。また、中国語会話書の分類をもう少し推し進め、形式や場面による詳細な分類を行うことが今後の課題であると考えられる。

【本研究で考える中国語会話書に関係する主要人物 7 名】

- (1) トーマス・ウェード（英国人）『問答篇』『語言自邇集』の著者
- (2) 広部精（士族、漢学者の息子）『総訳亜細言語集』の著者
- (3) 福島九成（士族、漢学者の息子）『参訂漢語問答篇国字解』の著者
- (4) 鄭永寧（士族、長崎唐通事）『官話指南』『官話指南総訳』の著者に繋がる
- (5) 宮島大八（士族の息子）『急就篇総訳』の著者
- (6) 田中慶太郎（東京外国語学校の卒業生）文求堂書店主人
- (7) 中田敬義（漢語学所・東京外国語学校の卒業生、派遣留学生）回顧録あり

【本研究で考える中国語会話書・中国語教育の時期区分】

- (1) 前哨期（唐通事の始まりから江戸幕府終焉前夜まで）
- (2) I 期 草創期（明治政府発足前夜から明治 20 年代中頃まで）
  - I - 1 期 草創前期 南京官話教育（唐話）期  
（明治政府発足前夜から明治 9・10 年まで）
  - I - 2 期 草創後期 北京官話教育への転換期  
（明治 9・10 年から明治 20 年代中頃まで）
- (3) II 期 確立期（日清戦争前夜＜政治情勢にしたがって日清韓会話書あるいはこれに繋がる韓国語会話書が現れる時期＞から第二次世界大戦終結まで）
  - II - 1 期 確立前期（日清戦争前夜から日露戦争前後まで）
  - II - 2 期 確立後期（日露戦争前後から第二次世界大戦終結まで）
- (4) 大転換期（第二次世界大戦終結から現在まで）

第 2 部では、第 1 部で時期区分を行ったもののうち I 期（明治初年から明治 20 年代中頃まで）に当たる草創期の中国語会話書について見た。資料としては、トーマス・ウェード著『問答篇』『語言自邇集』をもとにした『総訳亜細言語集』（広部精訳述）と『参訂漢語問答篇国字解』（福島九成訳述）を中心に中国語会話書 9 種を調べた。中国語原文改変の実態と日本語訳文の性格を考えながら、助動詞「です」の用法や、「に」と「へ」の使い分け、九州方言語彙の現れ方を見た。「に」と「へ」に関しては、明治 8 年刊の洋学会話書『語学独案内』（アイルランド出身のフランシス＝ブリンクリ著）および明治 13 年

刊の東京語学習書『沖縄対話』（沖縄県学務課編纂）との比較を行った。

その結果、佐賀出身の福島九成による『参訂漢語問答篇国字解』には、九州方言語彙や九州方言的な「に」多用が認められた。ただこれは、意識しにくい事柄であり、全体としては、全国に向けたものとなっている。また、助動詞「です」に関しては、明治10年代は様々な文末表現が行われ、また、試みられていたのであるが、『総訳亜細言語集』では1040例の使用が認められる等、助動詞「です」の多用が確認できた。これは、中国語会話書というジャンルの傾向を明らかにしたものであり意義のあることである。もちろん、中国語会話書の中にも『参訂漢語問答篇国字解』のように「です」が多用されないものもある。

中国語教育史については、六角恒廣による一連の研究がある。ただ、六角が研究していた頃にはまだ知られていなかった『問答篇』等の新資料が最近になって中国語学で取り上げられるようになってきた。しかし、まだまだ未解明の部分が多い。『問答篇』『語言自邇集』がどのように日本に伝えられ受容されたかさらなる究明が必要である。『総訳亜細言語集』と『参訂漢語問答篇国字解』における、中国語原文の改変についてもさらに詳しく調べる必要がある。洋学会話書との詳細な比較も今後の課題である。

第3部では、第1部で時期区分を行ったもののうちⅡ-1期（日清戦争前夜から日露戦争前後まで）に当たる確立前期の中国語会話書について見た。資料としては、日清韓会話書の成立に密接に関わる韓国語会話書も対象にして13編を扱った。Ⅰ期で助動詞「です」を調べたのに引き続き、指定丁寧表現と形容詞丁寧表現を主に調べた。参考のため明治初年の日本語会話書8編も調査した。その結果、指定丁寧表現と形容詞丁寧表現に関して、明治初年の日本語会話書8編には、「です」が1例しか現れていなかったのに対し、日清韓会話書（13編のうち9編について詳細に用例数を数えた）では、指定丁寧表現に611例、形容詞丁寧表現に57例現れていた。また、日清韓会話書の成立過程については、従来知られていなかったが、本論で、『兵要支那語』は先に成った『兵要朝鮮語』の体裁や語句をもとに作られたものであることを明らかにした。これらは日本語の発想で日本語が先に作られ、朝鮮語や中国語でどう表現

するか模索したものである。日本語の部分は日本語の発想に基づいた資料として利用可能なものであることも確認した。これは、基礎的な資料研究として重要な点であり意義があると言える。

台湾語会話書では植物語彙を中心に7編調べ、「ライチ」等の語が古い方の例になることを指摘した。日本語の研究対象は、決して中央語のみではない。Ⅱ期には日本語が話される地域が一時的に拡大した時期でもある。拡大した地域における日本語の研究を行うことは日本語学にとって意義のあることである。

日清韓会話書の一部は影響関係や成立過程を解明することができた。ただ、『日韓会話』と『日清会話』については、同じく参謀本部編纂でありながら、体裁や語句が異なっており、影響関係を明らかにすることができなかった。

『日本帝国文部省年報』は実際に確認したが、同様に各省の年報等を確認すると手がかりが得られるかも知れない。これについては今後の課題である。

本論では、個別にしか触れることができなかったが、日清韓会話書の体裁で、序論で触れた「日本語文が上段、中国語文が下段にあるもの」が多く、日本語の発想のもとに作られている。今後の課題として、これらをまとめて提示し、分析を行いたい。

場面との関連では、小説等では限定的にしか見られない戦争に関わる場面の言葉が現れている。軍隊言葉や軍用語との関連等今後解明すべき点も多い。

また、中国語会話書や中国語会話書的一种である台湾語会話書と台湾における日本語教科書は密接な繋がりがある。これについての解明も今後の課題である。

第4部では、第1部で時期区分を行ったもののうちⅡ-2期（日露戦争前後から第二次世界大戦終結まで）に当たる確立後期の中国語会話書について見た。資料としては、主要な中国語会話書とその訳述書を取り上げた。日本語が現れる資料としては『官話指南総訳』『東語士商叢談便覧』『談論新編訳本』『談論新編総訳』『官話急就篇総訳』『官話急就篇詳訳』『急就篇を基礎とせる支那語独習』『急就篇総訳』の8編を扱った。このうち特に『官話指南総訳』では、小説類には現れないような公的交渉の場面が数十ページに亘って現れて



いる。しかもこのような場面に「しめ」「し」「たる」等の文語が現れている。文語が混じることについては種々議論がなされているが、実際に口語的な文脈の中に文語を交ぜて使ったと考えてよい。このような考察は中国語会話書を使わなければならないことであり、日本語資料として中国語会話書が不可欠であると言え、本研究の意義は大きい。

『談論新編訳本』と『談論新編総訳』の違いについての調査は今後の課題である。

公的交渉の場面については、今後詳細をまとめる必要がある。洋学資料である『会話篇』にも一部似たような場面が現れており、比較しながら論じたい。

第5部では、中国語会話書における日本語訳文の特徴について、人称代名詞と当為表現に焦点を当てて見た。人称代名詞については、直訳度という考え方をを用いて論じた。これによると、中国語会話書は洋学会話書に比べて直訳度が高い傾向にあることが分かった。ただし、直訳度が極めて低い『急就篇総訳』のような資料も見られた。また、人称代名詞をどう表記したかという問題について『総訳亜細亜言語集』で明らかにした。当為表現については、二重否定型を取り上げた。周辺の当為表現の現れ方について詳しく見たところ、『東語士商叢談便覧』には、小説類にさきがけて「～なければだめです」のような例が現れていることが分かった。これは中国語会話書を調べなければ明らかにできないことである。当為表現を指標として調べてみると、当時の小説や国定教科書、日本語教科書とも異なった表現が中国語会話書に現れていた。これは、様々な層の言葉の反映であると考えられる。昭和初期の言葉の多様性を窺うことができた。

人称代名詞については、直訳度を調べて論じたが、先にも触れたが、「日本語文が上段、中国語文が下段にあるもの」もかなりあり、これらの分析は今後の課題である。

昭和初期の言葉の多様性のさらなる考察も今後の課題である。

終章では、各部の結論と意義、今後の課題をまとめた後に、本研究全体の今後の課題を以下のように掲げた。

- ・日本語学の分野で中国語会話書を日本語資料として位置づけること
- ・中国語会話書の分類をさらに明確にすること
- ・本論では、中国語からの訳述書の研究が中心になったが、今後、日本語の発想によって書かれた中国語会話書（中国語学習が目的）をまとめて分析すること
- ・上記の中国語会話書と日本語学習が目的となる中国・韓国・台湾における日本語会話書とを比較検討すること
- ・中国語会話書の一種である台湾語会話書の詳細なリストを作成すること
- ・日本語史と日本語教育史の連携
- ・中国語会話書を資料として洋学会話書も参照しながら、公的交渉の場面における文語使用の諸相を解明すること
- ・軍隊言葉、軍用語の諸相の解明
- ・中国語会話書に現れる日本語としての語彙、漢語の解明
- ・助動詞「です」と形容詞丁寧表現、「の」を介する言い方についての解明
- ・昭和初期における言葉の多様性についての解明
- ・中国語会話書、および、この一種である台湾語会話書と台湾における日本語教科書との影響関係を明らかにすること
- ・復刻版等を用い、下記の主要な中国語会話書を日本語学や日本語教育等関連分野の研究者に分かりやすく提示すること

『参訂漢語問答篇国字解』

『総訳亜細亜言語集』

『官話指南総訳』

『急就篇総訳』